

国内栽培したアカネ科植物カギカズラのインドール型アルカロイドの分析

薬学部 天然物化学 岩島 誠

アカネ科植物カギカズラは、生薬チョウトウコウ（釣藤鈎）の基原植物で薬用部位は「とげ（カギ付き小枝）」として知られる。漢方処方「抑肝散」に配剤される重要生薬としてその消費量が年々増加しているが、使用生薬 272 t/年の全てを中国産輸入品に依存している。本植物は千葉県以南で栽培可能で、篤農家による試験栽培の取組みが継続している。今般、森林研究・整備機構との共同研究により、国内各所から収集したカギカズラ 25 系統を高知県香美市の圃場で苗から栽培し、それらの「とげ」を 1 月初旬に収穫した。各試料について局方に規定される総アルカロイド含量を定量分析し市場品との比較を行った。その結果、全ての検体で局方規定の総アルカロイド含量（rhynchophylline と hirsutine 合計が、乾燥重量の 0.03%以上であること）を満たしていることが判った。一方、市場流通している生薬チョウトウコウも分析したが、アルカロイドの組成や含量がかなり異なっており、種の違いが原因と推定している。また、薬用部位以外の（根および成長点）についても分析を行い、薬用部位とは異なる成分組成であることが判った。認知症周辺症状の抑制の観点で、geissoschizine methyl ether の含量が大手漢方薬メーカーの興味を引いており、国産生薬としての商品化を目

指す上での問題点や解決への糸口，未解明の生合成経路などについても言及する。